

# 海が呼んでいるから

松山尚紀

## 一・重油が入った一斗缶

深い眠りから覚めると、身体は硬直したように動かなかつた。何度も夢のなかで目覚めようとしてもがいた記憶が徐々によみがえる。頭のなかに貼りついた粘着テープのように、しぶとく消えてはなくなるらない記憶だ。私のところを腐らせる、臓腑を腐らせる記憶。

汚い手。汚い耳。全部嫌いだった！

何度ももがいて、自分の頬を叩いて目覚めようとしても、目覚めることができなかつた。悪夢のなかで、次の悪夢へとつながる悪夢。過去に巡り合った嫌いだつた不良男に追い回され、包丁で刺される悪魔的な夢。

奇妙なニヤケ顔。親指の爪を噛むしぐさ。何度も頭のなかを去来しては、私のところに影を落とす。

頭は重油が入った一斗缶のように重く、いくら頭を働かせようとしても、言うことを聞かない。それは重力の重みそのものだった。都市で覚えた重力の重みそのもの。

私は嫌悪した。地方の自己卑下的な精神を持つ卑屈な連中。都市の冷たさ、せわしい苛立ち。どちらにも与<sup>くみ</sup>することができず、私は都市を生きていた。真冬の風が冷たい都市を凍えるような気持ちで生きていた。

昨日、酒に酔った勢いで、地方に住んでいる連中への恨みつらみをツイッターに書き込んだのが悪夢の原因なのだろうか？

それとも、私が観念的になりすぎていることが、悪夢の原因なのだろうか？ 私にはわからなかつた。

「重たい精神病は脳生理学に関する、唯物論的な脳内物質の分泌過多、あるいは過少により引き起こされる問題です。科学的客観的でない、宗教的観念的自己分析をする、ますます頭が観念的になってごちゃごちゃし、病気が悪化する可能性があるからや

めたほうがいいですよ」と担当の精神科医からは言われていた。

それでも、私は考えずにはいられなかったし、精神病の問題は宗教的観念的次元により解決するものだと考えていた。これは罪と罰の問題だ。私はそう考えた。

都市が重力になって重くのしかかる。それは重油の入った一斗缶のような頭の重み。千の銃口に眼差されて都市を歩いた昔日の夕暮れ。

私はなぜ都市を生きているのだろうか。重たい仮面を被って。母親や姉の呪いは地方を生きる人々の都市に残された呪いか。それらの重みを引きずりながら、私はいまも呪いの重圧に苦しんでいた。私は母親や姉の呪いからは解放されたはずだ。しかし、依然として、精神病の苦しみは残った。

ギリシア悲劇の『オイディプス王』由来の「エディプスコンプレックス」という言葉が精神医学の用語にあるように、家族の問題は精神病には大きく関係があると私は考えている。精神分析学の祖ジークムント・フロイトが発案した言葉だ。

簡単に意味を述べれば、統合失調症患者の持つ母親への愛着が自己愛であるところのナルシズムを生み、それが精神的後退の原因になっているという理論だ。

私は母親への愛着はすでになかった。それでも、なぜなのだろう。呪いともいうべきか、私には重い精神病という名の試練が課せられている。少なくとも、私はそう感じていた。

今日は月曜日だったので、出社しなくてはいけない日だ。

大学在学中の就活の際にすべてを脱ぎ捨て、都市郊外の福祉施設の事務員として就職し、みんなと同じ色の灰色の仮面を被ったつもりだったが、私だけが違う色の仮面を被らされて、場末の就労支援施設に生活支援員として追いやられてしまった。大学院の修士を修了して、六年が経つ。大学では、近現代日本文学を学んでいた。私も今年で三十歳だ。

就労支援施設の仕事は無理して行く必要はなかった。そもそも精神障がい者の枠で入社した福祉施設だったし、重い頭を引きずって仕事に行ったところで、眠気と気だるさにとらわれて、仕事にならず、みんなに迷惑をかけるのがオチだったからだ。

それでも、この部屋を出よう。

茶色のカーテンに閉ざされ、暗くなった部屋の片隅で、動かない身体を必死に首を横に振ることからはじめ、徐々に身体全体をほぐした。

自宅のアパートの重力は重たかった。すべての物が重く感じられ、生活がそこにありながらも、生活は古びた色をして、台所に並んだペットボトルと酒瓶の数々はカーテンの隙間から漏れる朝日を浴びても、愚鈍な色にマヒしていた。壊れたエアコンはガタガ

タと音を立てている。

私は精神の重い病気を患っている。幻聴や幻覚の症状があった。人の想像を絶するような悪夢もまた、病気の症状の一つであるらしい。

世間では精神病患者は悪魔の化身と思われるのだろう。それを裏付ける証拠はなかったけど、私はそれを確信していた。証拠こそないが、日に日にその確信は強まっていくばかりで、精神的な痛みが変えようもないその証拠だ。

私はまどろみがかかった重い頭で混濁した言葉を必死で分けて、自分を苦しめるものを解析して、突き放そうとした。

きつと形而下の欲望は悲しみの色に染まった黒いゴミ箱なんだ。

彼ら彼女らは、みんなその意識にすぎることできている。私はそう思い込むことではなく、生きながらえることができない。

就労支援施設の統合失調症を患う遠藤さんに会うことが、職場での唯一の楽しみだった。昼休みに喫煙所で一緒にタバコを吸う瞬間だけが、私のよろこびなのだ。

遠藤さんとは四十歳の恰幅のいい男性だ。以前、喫煙所で会話したとき、「ジプレキサという薬の影響で太ってしまった」という話をしていた。確かに、ジプレキサは食欲が増す薬だ。私もその薬の影響でやや太ってしまったのだけど。とにかく遠藤さんはい人だった。やさしいし、笑顔もあるし、気も合う。

他はほとんど全員、真っ赤な目をして、私を睨んでいるように感じられたので嫌に思えた。友人ですら、敵に見える私の生にはいったいなんの価値があるのだろう。

ドス暗い怨念のこもった、行き場のない城のように、私を見つめ返しては矢を放つあの就労支援施設。

私はそれでも、就労支援施設に行かなくてはならなかった。

遠藤さんに会うためだ。

遠藤さんは私と同じく精神病を抱えていながらも、病気の苦しみや労働に必死で耐え、就労支援施設のA型や一般就労に上がるために、休まず職場に来ている。

それに比べ、私は気弱だった。病状が悪化すると寝込んで、現実逃避してしまう。

「世が世なら、私は父親を殺害したテバイの国のオイディプス王であり、西洋哲学の基礎を確立した哲学者プラトンであり、フランス革命の夢の体現者ナポレオン・ボナパルトそのものなんだぞ！」

白い天井に向かってそう叫び、呆けたように世への恨みつらみを頭のなかで堂々巡りさせ、その日一日を終わらせる日も多々あった。その叫びはだれに届くこともなく、自分の頭を何度も巡って、自己肯定感と客観的状況の乖離を激しくさせる。私の苛立ちの

本質はそこにあるのかもしれない。それでも、その思いを押しとどめることはできなかった。

そんな一日はほんとうに憂鬱だ。ありふれた表現だが、この世のすべてが終わったかのように、どんよりした空間のなかで一人、側溝を這い回るネズミのように暗い過去に思いを馳せていた。

それも仕方のないことだ。悪夢がそうさせているのだから。空気がよんだこの部屋は、まるで世間とは別の世界のようにだ。

私はそもそも福祉施設で労働する必要性がなかった。父親は自動車部品メーカーを専門とする上場企業の元会長だったし、母親も不動産のオーナー会社の経営をしている。母親の会社に潜り込めば、労働に関しての話は終わりだった。

もしかしたら、職場へといくのは今日が最後かもしれない。そうだとすれば、あいつらの卑屈な面や、嫌味つたらしい下品な声を聞く必要もなくなる。もうすべてを投げ出してもいい頃なのかもしれない。私はそう思った。

それでも、遠藤さんの働くあの職場へ行かなくてはいけない。別れを告げに行くでもなんでも、会いに行かなくてはいけないのだ。もう八時二十分を過ぎていたので、遅刻は確定していたけど、それでもどうしても職場に行かなくてはいけないという義務感があつた。

私はベッドから這いつくばるようにして出て、シャワーを浴び、歯を磨き、会社に遅刻の電話を入れて、出勤の準備をしはじめる。

途中、なにが起きたわけでもないのに、妙な苛立ちを感じた。なぜこんなに私ばかりが理不尽な思いをしなくてはならないんだろう。

そう思い、腹いせに家にあるテレビを蹴っ飛ばして横にし、踏んづけて壊してやった。私はテレビが大嫌いだ。もはや憎んですらいた。テレビを買ったのは、親がテレビを見ることを勧めていたから、便宜上、仕方なく買ったに過ぎない。親がもし、自宅に来たときにテレビがないと言いつけが効かないからだ。

テレビの画面が割れる鈍い音は、私の気分を爽快にさせた。この血みどろになった加虐性こそが私の持つ罪悪の本質なのだろう。そう思ったけど、自分で自分の衝動を抑えることができない。

粉々になったテレビの画面を数秒見下ろすと、私は着替えることにした。クローゼットのなかを開ける。

白のシャツに紫色のボアのフリースに黒のジャンパー、下は灰色のスラックスを身につける。あらかじめ仕事の準備がされている青いリュックを背負うと、部屋を出た。グ

ツチのニットなど場合によっては着るかもしれないと思い、二着持っていた。しかし、職場に着ていくにはいい服すぎるので着ていかなかった。この国では、当然のことだ。世間から意識が遊離していると思われた人間が負けるのだから。

そう肝に銘じて生きてきたけど、そのせいで精神がすり減っている部分もあった。わかりやすい話だが、家に金があつたからである。これだけは揺るぎのない事実だ。そして、その事実を変えようもなく、金の問題で何度も人を裏切り、裏切られもした。

二月下旬の凍りついた風が身体に吹きつける。先日、降った雪が街の片隅に溶け残っていた。

「寒い。寒い」

そう独り言を言っても、寒さは変わらなかった。手袋をはめた手をこすって、自転車にまたがり、ブレーキが利くかどうかを確かめる。

以前、自転車屋の中年女性にブレーキの調整が利いていない自転車を売りつけられて、転んで、危うくトラックにひかれそうになり、死にそうになったことがあるからだ。そんなことをこの自転車に乗るたびに思い出す。

その後、自転車屋に即刻、電話して、「本人に謝らせに来い」と自転車屋の入っているショッピングモールの責任者を怒鳴りつけたが、「それはできません」の一点張りだったので、頭に来て訴訟を起こそうかと思った。

しかし、そんなことをしたら、また世間から意識が遊離しているなどなんだという話にもなるし、せっかくの時間ももつたない。そんなことを思っ、責任者に謝礼のお金と菓子折りを持ってこさせて、解決させてしまったけど、いまでも、あの中年女性を恨んでいる。

営業スマイルを装った薄ら笑いが癪に障って仕方がない。正直、本気で許せないというか、店に直接、怒鳴り込みに行つてやろうかと何度も思った。こっちは死にかけたんだ、当然だ。

そんなことを思い出しながら、自転車を飛ばして、坂道を登った。向かい風を受けて重くなった自転車のペダルが、私の精神力を容赦なく擦り減らす感覚が不快に感じられる。

朝の太陽は嫌に健康的な眩しさを放っていて、嘘ばっかりの輝きだと思えてならなかった。

二、なんでこんな苦しい思いして、労働しなきゃいけないんですか？

駐輪場に自転車を止め、施設のなかに入ると、「遅いつすよ。松国さん」と遠藤さんが笑いながら声をかけてきた。その笑顔には若干、疲労の色も残っていたし、不器用さもあったけど、私はこころの底に残っている元気を振り絞って、それを上回るくらい明るい笑顔で遠藤さんにあいさつを返す。

周囲の利用者さんはイスに座り、下を向いて、私の顔は見ずに黙々とポケットティッシュを袋に詰めていた。

今日は健康センターの風呂清掃やキッズ用のボールプール清掃はなく、施設でティッシュの袋詰めをひたすらやる一日だ。休憩を含んだ六時間の短い労働だった。

朝礼はすでに終わっている。

運がいいことに、私に唯一、敵意をもって接しない職員である向井管理者しか事務所にいない。私が遅刻したことを謝ると、なんでもないというような笑顔で許してくれた。社員証をタイムカードの機械にかざして、タイムカードを切る。時刻は九時五十分を表示していた。五十分の遅刻だ。

私はロッカールームに行つて、ユニフォームに着替えながら、管理者のやさしさを思った。

管理者は九時間労働にプラス残業三時間は当たり前で、休日もいつ会社から電話がかつてくるかわからないという責任も負っている。そんな厳しい労働環境でも、遅刻することが多い私に笑顔で接してくれる管理者にはいくら感謝しても足りない。それでも、ここでの労働はもう限界であるように感じていた。

所詮、金持ちの家の息子は大衆に混ざって労働することは不可能なのだ。私はそう悟ると同時に、こうも思った。みんな私を畏にはめるために、騙そう、恫喝しよう、必死なのだ。こんな環境にいるのは蜂の巣を自ら突つきに行っているのと同じようなものじゃないか。でも、今日で終わりなんだ。今日でここでの労働が最後だと感じると、不思議とあれほど嫌だった労働が嫌ではないように感じられた。

ロッカールームを出て、作業部屋に入る。

この就労支援施設は最低賃金以下で働いている人々の集まりだった。就労支援B型と呼ばれる区分の施設だ。要するに、福祉サービスを受けて、仕事をさせてもらっているという位置づけの作業所だった。

そんな場所だったので、労働者の労働意欲は高くなく、嫌々ながら親類に来させられ

ている人か、最低賃金以上をもらって労働できる就労支援A型か、一般就労を目指す人かに明確にわかれていた。

今日ここに来ていて、就労支援A型や一般就労を目指しているのは七人中一人つまり遠藤さんだけだ。

他の人々は大半がやる気がなくて、タイミングを見てはサボり、手を抜いて仕事をした。もちろん、本人たちもそのことを日誌に書かれていることは知っている。しかし、それでもやりがいが見出せる仕事とは言えなかったし、賃金が低かった。月に二十二日休まずに来て休憩を含めた六時間働いて、八千円程度なのだ。やる気がないと、手を抜いて仕事をやるために、仕事の依頼が減り、給料が減り、やる気が減る、という悪循環に入っていて、それを帰りの終礼で伝えていたのだが、それでもやる気が出ないのと同じだった。

私だって、理由こそ違え、労働意欲が湧かないことに関しては同じようなものだ。大した人間でないどころか、就労支援に来ていてる患者よりも病状が重いと思われる私が、彼らの仕事の管理・監督をして、労働意欲を鼓舞するようなことを建前上言っていること自体に大きな矛盾があったけど、それでも仕事なので言わざるを得なかった。

私は就労支援施設の作業部屋に入って早々、「遅刻してすみませんでした。今日も一日がんばりましょうね」とみんなに呼び掛ける。

「松国さん、やってらんないっすよ。給料いくらだと思ってるんです？ バカバカしいにもほどがあるんすよ、この仕事」

半田さんという今年、二十歳を迎える男性はそう言った。プロレスのスウェットをよく着ていて、今日もライオンの絵がプリントされているプロレスのスウェットを着ている。半田さんは交通事故によって、前頭葉下垂体の機能に異常があって、判断力が低下したり、自主性に欠けたりする部分がある。

「でも来ないわけにはいかないんでしょう？」

私がそう問いかけると、「俺、いつ辞めたっていいんすよ。親が行けって言うから、仕方なく来ているだけで」と半田さんはふてくされた声色で返答した。

半田さんは以前、ほかの利用者さんとティッシュの袋詰めの方が違うとか違うのかという話になって、ケンカをし、壁を蹴って壊したり、「やる気が出ないから帰る」と言っただけで突然、帰ってしまうことがあったりした。職場でも問題の利用者さんとして職員の間で話題になることがある。

正直、半田さんとは距離を置きたかったけど、社交的な性格でしょっちゅう仕事や人間関係に関する文句を言ってくるのだ。

「仕方なくてもなんでもいいんですよ。三時になれば、好きなゲームだって、ティックトックだってできるし」

「まあ、そうっすけど」

半田さんはそう言うとなにも言えなくなつて、「あー、あと二時間で休憩だ。激辛のカップラーメン、今日は買って来たんだぜ。うめーんだよ、あれ。なあ、聞いてんのかよ、哲さん」とティッシュを袋詰めしながら哲さんに言った。

哲さんとは、四十代後半の知的障がいを持つている男性で、就労支援施設A型で仕事仲間と問題を起こして、B型で仕事をしている利用者さんだ。背が低く、髪の毛は薄い。

「半田。ちゃんと仕事するんだぞ。そうしないと飯抜きになるぞ」

「そんなのだれが決めたんだよ。おかしくないっすか、松国さん」

半田さんはまた私に話を振ってきたので、「まあ、ごはんうんぬん云々の話はともかく、仕事はしっかりしたほうがいいですね」と返答した。

「なんでですか？」

私は驚いた。その声の主は半田さんではなく、遠藤さんだったからだ。

遠藤さんは半分、泣き目になっていた。

「なんでこんな苦しい思いして、労働しなきゃいけないんですか？ だったら、死んだほうがいいっすよ」

私は想定していない相手から思いもよらない質問が来たので、返答に困ってしまった。これももし半田さんからの質問だったら、「A型に上がって、一般就労に上がれば、モテるかもしれないですよ」とか適当に返答して、「松国さん、それはエロいっす」とか適当な納得の言葉が返ってきたかもしれないけど、相手が遠藤さんだとそういうわけにはいかない。

私は今日、辞めるつもりで仕事に来ているにもかかわらず、「きつと、試練なんだと思います」という偉そうなことを言おうと思つたけど、それよりも前に半田さんが真剣な顔で「遠藤さんはもつと休んでもいいと思う」と一言いったので、その場はそれ以上なにごともなく収まった。

状況が収まった理由は、年配者である遠藤さんが後輩の言葉に甘えていられないと思つたから、それ以上なにも言わなかったのだろうということにあるのだろう。私はそう推測した。

それ以降、半田さんは文句を言わなくなった。きつと遠藤さんが必死に病氣や労働に耐えているのを察して、なにも言えなくなったのだろう。



三、タバコはやめられないんですけどね

昼休みになって、作業部屋のとりの休憩室で持参した鮭のおにぎりとシーザーサラダを食べ終えると、私はそそくさと喫煙所へと向かった。

管理者以外の職員である小早川さんが本部から帰ってきたから、鉢合わせにならないようにするためだ。彼は完全に私を敵視しているし、皮肉や僻みひがの感情をさんざん投げかけてくる。どんな言葉を投げかけられたかは、思い出したくもなかった。

休憩室を出て、喫煙所に入る。というか、野外なので、喫煙所に出るといったほうが正しい。とにかく、私は喫煙所に行った。

ガラスの大窓を開ける。ただ灰皿が置いてあるだけの狭い空間で、目の前は砂利を敷いた道を挟んだ向こうに、コンクリート塀があり、そのさらに向こうは駐車場になっていた。

私よりも早く食事を摂り終えていた遠藤さんは、喫煙所でタバコを吸っていた。巷ちまたで売っている、一番安い銘柄のタバコだ。

私はコンクリートの床に座ると、遠藤さんに声をかけた。

「遠藤さん食べるの、早いですね」

「そうなんですよ、松国さん。食事の量、減らしてらんです。だから、すぐ食べ終わっちゃって。最近、ダイエットしてるんですよ。A型の仕事って、農業とか倉庫の仕事が多いでしょ？ だから、もう少し身軽になんなくちゃいけないなって思ってる」

「偉いですね」

「そう言ってる、タバコはやめられないんですけどね」

「私もです」

遠藤さんはタバコをふかしながら、おもむろに言った。

「松国さんはいつも家に帰ったら、なにをするんです？」

「私は音楽、聴いています。ジャズとかポップスとか」

「そっかあ。じゃあ、僕と一緒にだ」

「そうなんです」

「ときどきね、台所に寝転がって音楽、聴くんですよ。ベッドだけだと、飽きるんで。でね、台所で音楽、聴いてると、うっすら死にたくなるんですよ。松国さんだったらそんなとき、どうします？」

私はそれを訊いて、なんと回答していいかわからずにいると、「すみませんね、変な

こと訊いちゃって。無理に答えなくてもいいです」と遠藤さんはブラックの缶コーヒーを飲みながら言った。

「僕はね、寝ちゃうんです。なにかも忘れて、無心になって、もう死んだんだと思って、寝るんです。それでも、朝は起きなくちゃいけないんですけどね」

「私はお酒飲んで寝ちゃいます」

「松国さんはいつまで、この仕事続けるんですか？ ずっとですか？」

「実は――」

私は言葉を濁らせて言おうと思ったけど、濁しようがないので正直な言葉で言った。

「今日でこの仕事辞めようと思っっているんです」

「なんで辞めちゃうんですか？ 松国さんがいないと僕、寂しいですよ」

「もう精神的にガタがきてるんです」

「そんな」

「仕方ないことなんです。もう決めたことなので」

「松国さん、辞めても僕のこと忘れないでくださいね」

「ええ」

その後、短い沈黙が喫煙所を包んだ。空は晴れ渡っていて曇りがほとんどなかった。タバコを水の入った灰皿で消す音だけが響く。遠くでは車のクラクションが聞こえる。

私は思いつきで、遠藤さんに言った。

「海、行きませんか？ 退職祝いじゃないですけど。飯おごるんで」

「ありがとうございます。いいつすよ、もちろん」

「じゃあ、今週の日曜日の午後一時に駅前集合で」

部屋のなかから咳払いの音が聞こえた。

私は悪夢による頭痛を引きずった頭で、なんとか遠藤さんの午後の仕事の意欲になりそうなことを言おうと必死で考えて、結果「鎌倉野菜のパスタがおいしいカフェ、知ってるんですよ」と言う言葉しか出てこなかった。私の言葉を聞いた遠藤さんはうれしそうにしていた。

昼休みが終わる一時半はもう間近に迫っている。

#### 四、海が呼んでいるから

「そういえば、なんで海なんです？ 山でも、映画でもなんでもよかったんじゃないんですか？」

横須賀線の電車のシートに座って、遠藤さんは私にそう質問する。遠藤さんはいつもと違って、今日は憂鬱そうではなかった。彼はいつも以上に、積極的に私に話をかけてきたし、笑顔がいつもの何倍も輝いている。

それを見て、私はほんとうに遠藤さんを海に誘ってよかったなと思った。

「海が呼んでいるからですよ」

「なんすかそれ」

「意味はないです」

私がそう言うと、二人は笑った。ふたりにとって、意味がない冗談以上に、しあわせなことはなかったのだ。車窓からは三月前半のあたたかい日が差して、春の到来を私に予感させた。横須賀線は南進するにつれて、緑が増えてきて、北鎌倉まで来ると車窓の外はもう緑が一面に広がっている。

「早くタバコ吸いたいですね」

「ええ」

鎌倉駅を西口で降りると、喫煙所へと行き、二人はタバコを吸った。

「松国さん、急に辞めたんでみんな驚いてましたよ。『松国さんなんで辞めちゃったの？』って」

「だれが言ってたんです？」

「えーと」

「当てましよう」

私は空を見上げて、数秒考えると、「半田さん」と言ったら、遠藤さんは「そうです。意外だけど、納得って感じですよね」と返答した。

「あれ以降、半田さん、どうしてます？」

「文句言う相手いないから、哲さんにばかり愚痴言ってます。『なんで俺は彼女できねーんだ』とか言ってる」

「元氣そうでよかった」

「海、あんまり長くいらんないですよ。僕、明日、仕事なんで」

「わかりました」

そう言つて、二人でタバコの火を灰皿に落として消すと、海へと向かった。人でにぎわう御成通りのカフェでパスタを食べて、通りを抜け、和田塚の横を通り、住宅街を突っ切つて、公園をさらに抜けると、潮の香りが漂つてきた。

「海だ。海が見えますよ、松国さん。何年ぶりだろう、海なんて見たの」

「私はよく来てますけどね」

二人は海岸通りである一三四号線の交差点を渡ると、コンクリートでできた階段を下り、砂浜に降りた。夏とは違い、人はまばらで程よい賑わいを見せている。

太陽の光が反射してキラキラ光る水面の上、サーファーは波を追いかけて、ボードを滑らせていた。老犬を連れて歩く老夫婦。ポーズを決めて、写真を撮っている若い女性三人組。リュックサックを背負い、一人で波打ち際を歩いている青年。

コンクリートの出っ張りに腰を掛けると、私は遠藤さんに向かって言った。

「海はいいですね」

「なぜです?」

「都市の重力から解放されたかのような錯覚を覚えるからです」

「地方が好きなんじゃないですか?」

「いまさら帰れませんよ」

私たち二人は、目をつぶって深く深呼吸をする。

その瞬間だけ、私の壊れたところが、血みどろの加虐性が洗われたかのような気分になれた。

「また来たいですね、海」

「ええ。また今度、来ましょう」

「これ差し上げます」

「なんですか?」

私が手に持っていたのは、中上健次の小説集『十八歳、海へ』だった。

「これは勇気の書です。『海へ』は家族の死を描いた小説なんですけどね。たとえば、家族が敵だったとしても、周囲からの抑圧を感じていたとしても、時代の波が逆に向かっていたとしても、人は偉大な作家になれるんだということを証明した作品です」

「僕には難しいかもな。ふだん、あんまり本、読まないし」

「試練に耐えて懸命に生きれば、きっといつか周囲の人が認めてくれますよ」

「僕はそんな器じゃない」

「だれもが可能性を持っているんです」

「なんの可能性ですか?」

「強く生きられる可能性です」

「僕は弱いままでもいいんだけどな」

「それなら、それでもいいです。お互い、後悔のない人生を送りましょう」

遠藤さんは「読めるかどうかわからないけど」と言っ、本を受け取った。

夕暮れが近づいている。次第に海全体が藤色に染まって、水平線はオレンジ、紫、紺のあざやかなグラデーションを紡ぎ出す。風が凧なぐと、遠藤さんはこう一言いった。

「そろそろ帰りましょう。明日、仕事ですから」

「ええ」

海を後にして、来た道を戻り、喫煙所に寄るころにはすっかり空は真っ暗になっていた。

そして、私たちはお互いの持っていたタバコを交換する。お互いにタバコの好みが変わらなかったらしく、「マズイ、マズイ」と言いながら、笑ってタバコを吸っていた。